

# 1. 自他共栄論 I —共栄と衝突—

講道館 村田 直樹  
筑波大学 藤堂 良明

## 1. An Essay on the Principle of Mutual Welfare and Benefit I

—co-prosperity and collision—

Naoki Murata (Kodokan Judo Institute)

Yoshiaki Todo (University of Tsukuba)

### Abstract

The founder of Kodokan Judo, Jigoro Kano, advocates two principles as the Judo spirit for human lives, which are the principle of maximum efficiency and the principle of mutual welfare and benefit. He did intend to bring up his students to realize his two principles and expected them to make a contribution toward all the societies in the world.

However, in spite of his advocate and expectation, we can easily recognize and no doubt say that human beings have been having bloody histories everywhere on the earth through the centuries, and can find such clashes, even in holy scriptures. So I wonder where we could find and have the condition of the mutual welfare and benefit like Jigoro Kano advocates? Here I should say that human beings have to face the fact of collision or clashing in our world. Then, substantially how can we understand the meaning of Jigoro Kano's principle of Mutual Welfare and Benefit as a theory for our real lives? In this philosophical point of view, I made a survey such events as terrorism over the last 37 years and considered what a substantial understanding to the principle of Mutual Welfare and Benefit would be, and the results are as follows;

- 1) It seems to be impossible for human beings to avoid such events as wars and terrorism on the Earth, and which seems to be a symbolic and disjunctive proposition in so far as no one can avoid his destiny.
- 2) Jigoro Kano advocated the principle of Mutual Welfare and Benefit as the highest philosophy of Judo, and as a matter of fact, he succeeded in developing a lot of people who made much contribution to various groups such as politics, education and commerce etc.

- 3) Co-prosperity and collision seem to be a negative proposition, and the true condition of affairs would not be recognizable only by external appearance but would be seen substantially by constructing the application of Kano's theory with connoting both co-prosperity and collision.
- 4) The function of thought exists in two modes, of which one is an application of idealism and a means leading into action.

## I. 緒言

講道館柔道は武術的側面の他に修心の側面を有し、創始者嘉納治五郎によれば柔道修行の究竟の目的は「自他共栄」（以下、単に「共栄」と表記）に生きる人間形成であり、その方法原理が「精力最善活用」であるという。嘉納はこれを「己の完成」「世の補益」とも表現し、講道館の根本的教育方針とした<sup>1)</sup>。

さて、「共栄」とは優れて社会的課題であると言えようが、我々の社会には、大小夥しい数の衝突現象を観ることが出来る<sup>2) 3)</sup>。それは個人的、集団的争闘や民族的、宗教的紛争、果ては国家間に於ける戦争の様相を呈している<sup>4)</sup>。この事は今日のみならず、歴史的にも指摘可能なことである<sup>5)</sup>。人類社会は、古今東西、衝突と共に存在して来たと言っても許されよう。本論は、衝突現象の概観から「共栄」を如何に理解するか、考察する。

## II. 衝突現象の概観①—宗教・民族に顕著な衝突

政治学者福岡に拠れば<sup>6)</sup>、20世紀は戦争の世紀だった。その謂（いい）に従うならば、20世紀後半から21世紀にかけては、宗教・民族紛争の世紀であると言えるだろう。舞台は中東であり、イギリス・アイルランドであり、バルカン半島であり、地中海等である。即ちこれを端的に言えば西洋である。西洋に於ける民族と宗教の結びつきは、我々日本人の想像を遥かに超えて強い。西洋常識で言うならば、民族とは常に宗教を背負って移動・定住し、更に新天地を求めて侵略の歩を進めて行くものである。

そこで言う宗教とは、西洋常識に従えば「一神教」である。キリスト教もイスラム教もユダヤ教も、皆同じ絶対神を頭上高く戴いて、我々の宗教こそが正統だ、と主張してやまない。当然、そこでは対立が生じる。しかもその対立は、異教徒間のみならず、同じ宗教内でも生じている。宗教とはそういうものである、と言わざるを得ないかのようなのである。何れもが正統を主張し続ける以上、妥協点など見つけようはなく、確執は続き、衝突も辞さず、時代を超えて、1000年、2000年と続くことになる。妥協点無き宗教。或いは宗教の妥協点の無さ。ここに問題の核心がある。例えば、東西ドイツや南北朝鮮等は、民族分断の現象だった故に、再統一も可能なのだが、中東やバルカン、北アイルランド等の紛争は、そこに宗教が深く介在している故に、何年経っても出口が見えない状況である。パレスチナ紛争に至っては、領土問題そのものに「旧約聖書」の記述が関連してくる。そこを起点にユダヤ教対イスラム教の宗教戦争に発展・拡大してしまっている。解決の糸口など見出せるのか、と甚だ疑問に思われる。

## III. 衝突現象の概観②—テロリズムの世紀<sup>7)</sup>

政治目的を達成する為には、自らの命をなげうつことも厭わない。これが自爆テロである。冷戦の終結によって、テロ組織への監視が緩んだのか、その恐怖は南アジアや中東のみならず、世

界各地へと広がりつつある。

2000年2月21日、世界各国の警察、軍、諜報・治安専門家の精鋭80人がイスラエルに集結した。その目的は、3日間に渡る初の国際自爆テロリズム対策会議に出席する為であり、その理由は、中東と南アジアに端を発する世界各地への自爆テロの広がりであった。専門訓練を受けたテロリスト達の目的は、ターゲットを滅ぼし、同時に自らも死ぬことである。犯人生還の可能性を想定していない点で、他のテロ行為とはその性質を決定的に異にしていると言えよう。

1980年代、この捨て身の暴力行為は、レバノン、クウェート、スリランカ等の3カ国に限られる現象だった。しかし、90年代に入ると、イスラエルやインド、アルゼンチン、パナマ、アルジェリア、パキスタン、クロアチア、トルコ、タンザニア、ケニア等へと広がった。以後、紛争地域からの人口流出、冷戦終結によるテロ組織への監視の緩み、テロ組織の国際的ネットワーク等の条件が揃い、自爆テロはさらに広がる勢いを見せている。

それではここに、自爆テロ攻撃を仕掛ける可能性の或る組織を調べ上げると、約10在るとみられる。宗教団体が比較的多いが、必ずしもそれらばかりではない。

イスラエル占領地の「ハマス（イスラム抵抗運動）」、「パレスチナ・イスラム聖戦」。レバノンの「ヒズボラ」。エジプトの「ジハード」、「イスラム団」。アルジェリアの「武装イスラム団」。インドの「バツパール・カルサ・インターナショナル」。スリランカの「タミル・イーラム解放のトラ」。トルコの「クルド労働者党」。アフガニスタンでオサマ・ビン・ラディン率いる「アル・カイダ」等である。

#### IV. 衝突現象の概観③—世界テロ年表— 1968～2001<sup>8)</sup>

手元にある資料に拠り、過去約30年間強の世界テロ年表を作成してみると、以下のようである。この資料によれば、①通算7年間は起きていないが、残り26年間は起きていること、②平均約1.77回/年の頻度(26年の計算)であること、③場所は不特定であること、④イスラム教信者の行動が顕著であること等が判明しよう。但し、テロリストという呼称も、或るイデオロギーの立場からの呼称であり、正義が何れに在るかどうかは、一概には言えぬものと思われる。特に、‘唯一絶対神’を戴く宗派に与(くみ)する立場のその不動性、乃至は堅固性は「永遠」に拠って立っているという実態を、我々は有史以来、観て来ている。新旧約の聖書の時代に即して、正義の主張の衝突の連続である、と言ってよいだろう。

\* 1968

- 1) 07/22 「パレスチナ解放人民戦線 (PFLP)」のメンバー3人がローマ発テルアビブ行きエル・アル機をハイジャック

\* 1970

- 2) 02/21 チューリッヒ発テルアビブ行きスイス航空機が離陸直後に空中爆発。47人死亡。PFLPが犯行声明

- 3) 03/31 羽田発福岡行き日本航空351便「よど号」を9人の「赤軍派」がハイジャック

\* 1971

- 4) 03/01 米連邦議会議事堂で爆発。死傷者0。ラオス作戦への抗議か

\* 1972

- 5) 05/19 ワシントンの米国国防総省4階で爆発。死傷者0。反ベトナム戦争の「ウェザーマン」が犯行声明

- 6) 05/30 親アラブの立場を取る「日本赤軍」の岡本公三ら3人がテルアビブ・ロッド空港で小銃を乱射。26人死亡、約80人負傷
- 7) 09/05 ミュンヘン五輪の選手村をパレスチナゲリラ組織「黒い月」が襲撃。イスラエル選手など11人が死亡
- \*1973
- 8) 09/28 ニューヨーク (NY) の ITT (国際電信電話会社) オフィスで爆発。「ウェザーマン地下工作隊」が犯行声明
- 9) 12/17 ローマ空港でパンアメリカン航空機が襲撃され、31人死亡、約40人負傷
- \*1974
- 10) 09/08 テルアビブ発アテネ経由ローマ・NY行き米トランスワールド航空機がギリシャ沿岸上空で爆発。88人死亡。「パレスチナ解放アラブ民族主義青年機構 (UNYLP)」が犯行声明
- 11) 10/26 NYの金融、商業センターで爆発5件。死傷者0。「プエルトリコ民族解放武装勢力 (FANL)」が犯行声明
- \*1975
- 12) 01/29 ワシントンの米国務省で爆発。「ウェザーマン・アンダーグラウンド」が犯行声明
- 13) 10/27 NY市内の米政府機関や銀行で爆発5件。ワシントン、シカゴでも爆発。「プエルトリコ民族解放軍 (FALN)」が犯行声明
- 14) 12/29 NYラガーディア空港で爆発。11人死亡、75人重軽傷。アラブ・ゲリラ関与を思わせる犯行声明が出るも、「パレスチナ解放機構 (PLO)」、PFLPとも関与否定
- \*1976
- 15) 06/16 駐レバノン米大使ら3人殺害される。「アラブ共産主義者機関 (ACO)」関与か。逮捕者の背後関係公表されず
- \*1977
- 16) 08/03 NYで爆発5件。国防総省事務所の入ったビルで1人死亡、2人重軽傷。「プエルトリコ独立解放戦線」が犯行声明
- 17) 09/28 「日本赤軍」丸岡修ら5人がパリ発東京行き日本航空472便をハイジャック。ダッカ空港にて「超法規的措置」で犯人の身柄拘束せず
- \*1978
- 18) 03/16 イタリアのテロ・ゲリラ組織「赤い旅団」がアルド・モロ元首相を誘拐。後に同氏は死体で発見される
- \*1979
- 19) 11/04 テヘランの駐イラン米大使館をイラン人グループが占拠。米国人など90人を最長で444日間人質に
- \*1981
- 20) 10/06 カイロでサダト・エジプト大統領が兵士に自動小銃で撃たれ、死亡。イスラム過激派「ジハード団」による犯行
- \*1982
- 21) 10/01 テヘラン中心部のイマーム広場付近で爆発、700人以上死傷。ホメイニ師は過激派「ムジャヒディン・ハルク」の犯行と非難
- \*1983

- 22) 04/18 バイルートの駐レバノン米大使間で爆発、米国人ら140人死傷
- 23) 10/23 バイルート空港近くの米海兵隊司令部本部と仏軍宿舎で爆発、米仏兵299人死亡。「イスラム聖戦機構」が犯行声明。米国防長官はイランとシリアが関与と断定
- 24) 11/07 米連邦議会議事堂上院民主党院内総務室付近で爆発。「武装抵抗団」が犯行声明。米軍のグレナダ侵攻、レバノン駐留へ抗議
- 25) 12/12 クウェートの米、仏大使館、国際空港など6ヶ所で同時爆発。60人以上死傷。「イスラム聖戦機構」が犯行声明。反イラク地下活動組織「アル・ダワ党」のイラク人7人とレバノン人3人を逮捕

\* 1984

- 26) 09/20 バイルートの米大使館で爆発。8人死亡、約70人負傷。「イスラム聖戦機構」が犯行声明を出すも指導者は関与否定

\* 1985

- 27) 03/08 バイルートのシーア派居住地区で自動車が爆発、72人死亡、250人以上負傷
- 28) 05/10 ニューデリー及び郊外でシーク過激派が爆弾テロ。85人死亡、150人以上負傷
- 29) 06/14 カイロ発アテネ経由ローマ行き米トランスワールド航空機をシーア派過激派がハイジャック、バイルートへ。人質1人死亡
- 30) 07/11 クウェート市内で爆発2件、100人以上死傷。「アラブ革命旅団機構」が犯行声明

\* 1986

- 31) 09/05 カラチ空港駐機中のパンアメリカン航空機が襲撃され、21人死亡、130人負傷。「ジュンダラ（神の兵士）」が犯行声明

\* 1987

- 32) 11/29 バグダッド発ソウル行き大韓航空機がビルマ沖上空で北朝鮮工作員「金賢姫」らに爆破され、115人死亡

\* 1988

- 33) 12/21 スコットランド上空でフランクフルト発NY行きパンアメリカン航空機が爆発、270人死亡。米政府はリビアの犯行と断定

\* 1992

- 34) 12/29 イエメン・アデンのホテル爆発、2人死亡。オサマ・ビン・ラディン関与か

\* 1993

- 35) 02/26 NYの世界貿易センタービルで爆発、6人死亡、1,000人以上負傷。ビン・ラディン関与か。「イスラム団」アブデルラーマン師ら起訴

\* 1995

- 36) 03/20 「オウム真理教」による地下鉄サリン事件。12人死亡、3,794人重軽傷
- 37) 04/19 米オクラホマシティ連邦ビル爆破事件。168人死亡、400人負傷。米極右武装集団「ミシガン・ミリシア」メンバーの犯行
- 38) 11/13 サウジアラビア・リヤドの国家警護隊軍事施設で爆発、米軍顧問ら6人死亡

\* 1996

- 39) 01/31 スリランカ・コロomboで中央銀行ビル爆発、120人死亡、1,400人以上負傷。過激派「タミル・イーラム解放のトラ（LTTE）」の犯行
- 40) 06/25 サウジアラビア・ダーラン近郊の米空軍基地宿舎が爆破され、米兵19人死亡、約400人負傷。ビン・ラディン関与か

- 41) 07/27 五輪開催中の米アトランタ市内五輪公園で爆発、2人死亡、110人負傷。白人男性を指名手配
- 42) 12/17 ベルーの「トゥバク・アマル革命運動 (MRTA)」がリマの日本大使館公邸占拠。翌年4・22ベルー特殊部隊が突入し武力解決
- \*1997
- 43) 11/17 エジプト・ルクソールで「イスラム団」が発砲、日本人観光客を含む62人死亡。ビン・ラディン関与か
- \*1998
- 44) 08/07 ケニア、タンザニアの米大使館同時爆弾テロ事件。224人死亡、約5,000人負傷。米政府はビン・ラディンを首謀者と断定
- \*2000
- 45) 10/12 イエメン・アデン港に停泊中だった米海軍イージス駆逐艦「コール」にゴムボートが突っ込み爆発、乗組員17人死亡。30人以上負傷。ビン・ラディン関与か
- \*2001
- 46) 09/11 NYの世界貿易センタービル北、南棟に、ハイジャックされたアメリカン航空11便、ユナイテッド航空179便が突入。ワシントンの米国防総省にハイジャックされたアメリカン航空77便が突入。ピッツバーグ近郊にハイジャックされたユナイテッド航空93便が墜落。併せて死者、行方不明者6,000人以上

(文中で言及のないものは犯人・犯行組織不明)

## V. 思想の機能<sup>9)</sup>

多くの犠牲者数を記録する上述の歴史は、全て人間同士の衝突現象である。同じ人間といえども、何ゆえにかくも多くの衝突があるのか。一つには思想の相異が原因であろう。思想には相手を否定するものもある。例えば一神教を奉じる宗教思想は、他を排斥する。宗教戦争がこの類である。ここに思想とは、或る機能を持つものと言うことが分かる。思想の機能とは如何なるものか。

知的存在である人間は思想を持つ。その機能とは、少なくとも二つの次元で考えられよう。即ち知的次元と行動的次元である。

知的次元：思想は観念の裡に存するものであり、観念の対岸に実践的行動がある。思想が対岸である行動という陸に揚がる為には、行動力が要請される。行動力が無い場合、実効とは無縁にして、思想は単に唱えられるのみのものとなる。即ち、知的次元に止まるものとなり、それ以上のものではない。思想内容が社会的性格を帯びたものである場合、行動無き=実効と無縁のこの思想は、社会的果実も無きものである。こうなるとそれは恰も消閑の余技、乃至は観念の遊戯以上のものではなく、知的遊楽という性格の存在意義を有するものとなろう。知的次元に止まる思想は、思想の為の思想と言うべきか。

行動的次元：他方、思想が行動に移され、実効を挙げる場合、この思想は知的遊楽の範囲を越え、行動を生じさせる機能となる。これを換言すれば、行動的次元に在る思想は、実効という目的達成の手段として、その存在意義を有するものとなろう。

但し、本論は知的遊楽としての思想も、実効獲得手段としての思想も、共に人間の生の営みの上での必須の要件である、という立場を取っている。

## VI. 「共栄」は指導方針

既述の表を見て分かるように、テロリズムは20世紀末の国際的問題と言えよう。20世紀の象徴的商業地域マンハッタンにて、6,000名を越える人命が失われ、それに伴って世界経済が戦禍に揺れた。人類社会の21世紀の始まりは、暴力と破壊、無秩序と悲惨といった歴史で書き込まれることになったが、これを換言すれば、テロリストによる宣戦布告の世紀の始め、ということであろう。我々人類の衝突という現実、21世紀にも確実にもたらされた証である。この現実を直視しながら、我々は、嘉納の言説を改めて見てみたい。嘉納は衝突や争いの存在する現実をどう捉え、何と述べているのか<sup>10)</sup>。

「社会生活をしている人間が、己の栄（＝自身の欲求が充たされた状態。精神的方面のことに最も重きを置く）を得んと努力する場合、他の人の同様の努力と衝突することがある。この時、双方が自分の考え通りに行動すれば、双方の力が協同することが出来ず、互いに破壊し合うことになる。その結果として、双方の力の和が用を成さず、破壊した後に残った部分だけが用を成すことになる。それ故、衝突を避けて、協調を求めなければならぬ。この協調は自他共栄主義でなければ達せられぬのである。それ故に、自他共栄主義は理想である。ただこの理想の実現が甚だ困難である。現に社会に衝突が甚だ多く、衝突して互いにその力を無用に消費しつつあるのである。社会の実際がかくの如き有り様であるから、或る人には一種の疑問が起こってくる。即ち理想はどうであろうと、事実について社会に競争・争闘が絶えぬのであるから、自他共栄のみに依って社会のことを説明することは出来ぬのではないかと。抗争的協力というような意見も成立する所以である。さりながら、社会の事実は事実として、理想は何処までも自他共栄でなければならぬ。そういう理想が無ければ、指導の方針が立たぬからである<sup>11)</sup>」

嘉納は社会に存在する衝突現象を知悉しているし、且つ又、理想である共栄の実現困難なことも良く認識している。それでも自他共栄を何故唱えるのか。その理由は、「そういう理想が無ければ、指導の方針が立たぬからである」。

即ち、嘉納にとって自他共栄とは、突き詰めて考えれば、「指導の方針」であると捉えることが出来よう。ここに学術的関心は、嘉納が唱える「共栄」思想を、理想や指導の方針として提示する一方で、上述、纏々述べて来たようなテロリズムが存在しているというその事実、即ち人類の衝突現象を嘉納の「共栄」思想とどう位置づけ、如何に認識し、対応して行けばよいのか、という点である。或いはまた、かような社会事象とは一切無関係にして無関心に、ただただ柔道衣を着て、今日も道場で形と乱取に汗を流してさえいればよい、と断言しても良いのか、良くはあるまい。少なくとも、「精力最善活用」に生きる柔道修行者の姿勢態度として、如何なる認識が用意されるべきか、ここを解明しておく必要があろう。

### VII-A. 社会生活の存続発展の原理

嘉納は時代の変遷につれて、「道徳に関係する考えの実に複雑を極むることになった」という認識を示しながら、宗教、伝統的道徳、良心、学説等、巷間、人口に膾炙する諸点につき、それぞれの持つ越え難き問題点を次のように検討している<sup>12)</sup>。

①宗教の道徳は信仰に拠るものとすべきであるから、或る人の信仰と他の人の信仰とが異なる場合のあることを許容しなければならない。故に多数の場合は、その信仰に拠る道徳に相違が生じよう。何れが是であり、何れが非であるかを何に因って決定すべきか。単に信仰という他に何か別に根拠を求めぬ限り、決定は不可能であろう。

②伝統的道徳を無批判で守ることは、時勢の変遷が許さない。旧い時代には奴隷が存在してい

だが、文明世界の今日、跡を絶った。財産の所有権もその概念が変わった。その他、封建時代の道徳で今日そのまま適用出来ぬものが段々生じてきている。

③良心も信仰と同様で、自分の良心はこれを正と認め、あれを善と認めると言っても、他の人はまたその人の良心で他のことを正なり善なりと認めよう。二人共が同じ立場に居て違ったことを主張するのであるから、良心以外に何か別に裁判するものがなければ、何れが正しいか分からぬことになる。

④学説が異なれば道徳も異なることはやむを得ないことである。宗教の場合には他の人を自分と同じ信仰に引き入れぬ以上は、自分と同じ道徳を信じるということを保証することは出来ない。同様に学者は同じ学説を奉ぜしむる様にしない限りは、道徳の主張も一致出来難い。古来、宗教は幾多の宗派に分かれ、学説にもまた多数の学派がある。これらを一定せしむる事の不可能なることは、古今東西の歴史に照らして明らかである。

宗教、伝統的道徳、良心、学説等に拠る式の問題点をこう分析して述べ、嘉納の視点はこれらの諸問題を超越して解決する理論構築に向かう。その解答が「社会生活の存続発展の原理」であった。

#### Ⅶ-B. 社会生活の存続発展の原理

何ゆえにこの命題（文章）が、解答なのであろうか。嘉納はその理由を、反問の形から説き、概要、次のように述べている<sup>13)</sup>。

①従来、多くの人が道徳の根拠として考えていたことは、人智が進んできた今日に於いては、全ての人を満足させることが出来ない、という自分（=嘉納）の考えに異議を唱えるものはあるまい。そこで社会生活の存続発展ということを根拠とすることにも同様、満足せしむることの出来ない理由があるか、という点を吟味しなければならない。他の根拠については、或る人は認めても他の人が認めないと言った時、それを理論を以って強いることが出来ないのであった。信仰に拠って一人が或ることを善と主張しても、他の人が同一のことを信仰しないと言え、如何ともすることが出来ないのである。

②しかし、社会生活の存続発展ということは如何なる宗派の人でも、どんな学説の人でもそれを認めないということが出来ようか。誰でも社会から離れて単独の生活を得るならば、社会生活の存続はどうでもよいと言い得られようが、実際社会から離れて単独の生活を欲するものは在ろうとは思われない。何ゆえに社会を離れることを欲しないで、そのうちの一員として生活したいのかというと、社会の一員として居れば、社会生活の全ての便利が得られるからである。

③その社会のうちに加わっている全ての人とは同様の関係で、協同生活をしているのであるから、その社会が存続せず、解体するようなことはあらゆる方法を以って防がねばならない。協同生活の義務を守るものは、他の人からは好意を受け、また助けられ、それに背くものは非難され、必要な場合も助けを受けることが出来難くなる。かく社会の解体を防ぎ、結束を図ることが義務であると同時に、社会生活の発展を図ることも協同的の義務である。また、この義務を守らぬ為、社会が退歩し萎靡（いび）すれば、協同的の損害であり、個人的にも種々悪影響を受けることになる。それ故に、社会の一員たる以上は、その社会の発展の為に常に応分の力を尽くすことは辞することは出来ぬ。ここに道徳的に求むれば、一人の異議を挟むものはあり得ぬのである。実際に於いては、従来種々の形に於いて説かれていた道徳の教えも暗裏にここに根拠を求めていたのであると信ぜられる。それ故に、道徳の根本を、この社会生活の存続発展ということに求め、



従来の道徳の教えを大体これに依って説かれたものと認め、それらを依然尊重して行くがよいと思う。

④しかし、従来の教えに若し我々の根拠に合致せぬものがあれば、それらは容認することが出来ぬ。また若し従来の道徳教の間に衝突があり、不一致があった場合には、我々の根拠に合致するものを取り、背くものを捨てることにならねばならぬ。それからまた、従来教えられ来った事も時代の変遷により、新たな解釈を加えなければならぬこともある。そういうことも今日の日本の社会生活を存続せしめ、発展せしむるにはどうすればよいのかということを経験として考えれば、容易に判断が出来るのである。

⑤それから国体とか政体とかいう問題についても説明が容易に出来る。例えば、同じ道徳上の根拠に基づいて、日本では日本の国体を擁護し、北米合衆国では共和政治を擁護するという理由が明瞭に立つようになる。

⑥それから道徳の細目に至っては、従来の教えを是認し、それらを今日の時勢にあてはめて一々吟味してみると、大体に於いては差し支えないが、種々の点に於いて新解釈を加え、軽重を考え直してみなければならぬことがある。封建時代に最も適当であったものが、今日多数の意見を尊重し、事を決する時代にあてはまらぬこともあり、また産業の発達に力を用いなければならぬ現代に於いては、封建時代の道徳そのままを教えて適当であると思われぬこともある。

⑦それでは如何に取捨するかというに、矢張り、今日の社会生活を存続発展せしめて行くにはどうすればよいのかという根拠から論断を下さなければならぬ。

以上が社会生活の存続発展を原理とするべき嘉納の主張だが、上述⑤「略。日本では日本の国体を擁護し、北米合衆国では共和政治を擁護する」の言及から、「共栄」の姿が次のように把握可能であろう。即ち、日本は日本、北米は北米としてそれぞれ容認し、擁護するのが共栄の姿である、と。ここには日本と北米が例示されていて、その他の例—例えば敵国—は語られていないが、社会生活の存続発展の原理は、日本は日本の社会生活の発展を、北米は北米の社会生活の発展をさせること、という意味であろう。地上、社会は民族個々に存在し、民族個々の間には平和的關係と敵対的關係とが在る。またこの関係は必ずしも固定されたものではなく、可変的であることは歴史が明示している。和平は壊され、味方は敵になり、また敵は味方になり、そして味方がまた割れる。敵国も味方の同盟国も、何れの関係に在るとしても、それぞれいつの場合も、それぞれの国に於ける社会生活存続発展の原理は殺がれまい。何故ならば、何れの国であろうと、主権国家、乃至は各民族はその命題として、社会生活の存続発展を否定することはなく、むしろ、永遠の課題であると思われるからである。

このように考えてくると、ここに「共栄」とは、対立をも含む敵味方双方を包摂した概念と言えなくもない。敵も栄える、味方も栄える。こういう把握が可能と思われる。すると「共栄」という思想は、地上の全てを包含した内容を持つと言わなくてはならなくなるが、果してそうか。

ここに我々は、新たな知的地平線の広がり行くさまを見る。即ち、事象の存在態様、乃至は存在様式の観察の必要性である。事象はそれ自身、他と絶縁的に独立して存在するものなのか、それとも何らかの支持、相関等を背景に、連関体として存在するものなのか。例えば、敵国は、或いは敵対する民族は、その軍事的能力を如何に向上させ得るのだろうか。単独、絶縁的に能力開発を果してきたのか。卑近な例で考察すれば、兵器能力の水準向上は、敵国や敵対民族の有する兵器に関する情報とその契機になってはいないのか。軍縮会議とは関係国間の兵器の質・量を前提の会議であることを思えば、対立国間の軍事能力向上<sup>14)</sup>とは、まさに相手国の状況がそれぞれ

の契機になっているということが分かる。ここに共存の様子が見て取れるが、本論では事象の共存について、尚詳細な考察が要請されよう、という指摘に止め置く。

#### Ⅷ. 結語

- 1) 人類社会には戦争やテロリズム等に象徴される衝突がある。
- 2) 嘉納は「自他共栄」を柔道修行の究竟の目的であると高唱し、社会生活の存続発展に貢献する人間形成、人材輩出を目指した。
- 3) 衝突と共栄は一面、対立概念と言えるが、衝突を包摂する新しい共栄思想の理論が拓かれないと、いつまでも表面上の議論にとらわれることになり、事象の存在をその背後で支配する法則性への接近が困難である。
- 4) 思想の機能は、観念の遊戯、行動の手段の二つに在る。

#### Ⅸ. 引用文献

- 1) 嘉納治五郎, 柔道教本, Pp. 113 - 118, 堀書店, 1953
- 2) Huntington., Samuel P. 鈴木主悦訳, 文明の衝突, Pp. 19 - 50, 集英社, 2001
- 3) 前掲書, Pp. 405 - 457
- 4) 柳田邦男, グローバル・テロによる超世界戦争の始まり: 文藝春秋10月緊急増刊号, Pp. 14 - 23, (株)文藝春秋, 2001
- 5) 防衛大学校防衛学研究会 (平間洋一代表), 軍事学入門, P. 98, かや書房, 1999
- 6) 福岡政行 (監修), 21世紀世界の民族紛争, P. 3, 主婦と生活社, 2001
- 7) ローハン・グナトラ, 野口やよい訳, 広がる自爆テロの恐怖: 「新世紀戦争の読み方」 Foresight 緊急編集, Pp. 42 - 45, 新潮社, 2001
- 8) 前掲書, 世界を襲った重大テロ年表, P. 51
- 9) 下中邦彦 (編集), 哲学事典, Pp. 588 - 589, 平凡社, 1986
- 10) 嘉納治五郎, 作興第9巻第1号, P. 6, 講道館, 1930
- 11) 前掲書, 第4巻第5号, Pp. 2 - 5, 1925
- 12) 嘉納治五郎, 道徳教育第1巻第2号, Pp. 2 - 3, 目黒書店, 1932
- 13) 前掲書, Pp. 1 - 3
- 14) 防衛大学校防衛学研究会 (平間洋一代表), 軍事学入門, Pp. 104 - 129, かや書房, 1999